

●目覚むれば飲食のこと先ず思う斯くなるものか老いのなりわいは心配している。いつものようではないから。それでも、飲食は大きな要素なのだ。

この感じは、必ずしも老いということに解消されないかもしれない。すぐ次の、こんな歌にも、することをしてなお空しいのだ、一つの身振りがあがる。

愛着の残る品じな片付けてしばし空しく思い出さぐる

市川茂子

●満開の予報は四月二日にて寒のもどりの風に叩かる

河村郁子

桜の満開予報は、今やニュースの大きな一部だ。冒頭の歌からも、これは、東京の桜だろう。いずれにしても一日一日なのだから、寒のもどりの風もある。一連は、桜尽くしなのだが、時間と空間経過がある。桜は、いろいろなもののインデックスでもある。

薬師堂の橋渡りつつ見る蓄なべて弾けんばかりにふくらむ  
残雪の甲斐駒ヶ岳を見つめつつかの日の山の友らを偲ぶ

●蝶生まるまだ影もたぬ淡さかな

谷垣満壽子

上野のパンダの赤ちゃんがニュースになっている。少しずつパンダらしくなってきた。生まれたばかりの蝶は、小さく淡々しいだろうな。それを、まだ影もたぬ、と裁断するようにいう。思いはあるのだ。次の句は、もう少し大きいもの。

櫻並木ゆつくり抜ける路線バス

こういう光景の中にわれわれの春がある。

花の雨遺品少なく棲むと決め

遺品は、ご夫君の残したものでしょうか。一連タイトルは、「春」だった。

●なめらかな日本語なればキリバス人ケンタロ・オノ氏は仙台生まれ

布宮慈子

一連タイトルは、「キリバス」。一首一首読むにつれて、キリバスのこと、ケンタロ・オノ氏がどういう人かということが分かってくる。そのうちでも少し説明的な歌。次の歌もそう、場面がみえる。また、結論的な部分でもある。

キリバスの十万の民いかに生きむ長表公民館ながおもてにわれら思ふも

ケンタロ・オノ氏は、(赤道直下に浮かぶ島)キリバス(共和国)の名誉領事。キリバスの八割が沈むかもしれぬ(という)。その若者に人気があるのが鯉の一本釣りの学校だ、とも。この一連でしることは多いが、読み手は、ふつくらとした語りのなかにある。

●アパートのヴィーナスBは塗装中あと数日で四月この日々

小野澤繁雄

四月は何事も一新する時期。アパートの外壁を塗り替えれば、新しく入居する人がいるかもしれない。どんな色になるのだろう。それにしても「ヴィーナスB」というアパートに、女性はいいとして男性は入るだろうか。いや、わざと男性が敬遠するような名にしているのか。歌は、四月になる前のやや不安定な時期を詠う。つぶやくように日常が差し出されている。

●ハチクマよ一万キロの春の旅

新野祐子

ハチクマ（蜂熊、八角鷹、蜂角鷹）はタカ科の鳥。同じ猛禽類のクマタカに似た姿でハチを主食とする性質を持つことに由来。日本では初夏に夏鳥として渡来し、九州以北の各地で繁殖する（百科事典、ウィキペディアなど）。さらに調べると、二〇一二年にハチクマプロジェクト（慶應義塾大学SFC研究所生物多様性研究ラボ、樋口広芳特任教授）がハチクマの渡りを衛星を使って調査している。それによると、九月に青森県や山形県を飛び立ったハチクマは日本列島を南下して九州に入り、佐世保市を通過し五島列島から海上へ出る。東シナ海を越え、中国の内陸部を南下、インドシナ半島・マレー半島を経由してボルネオやフィリピン、ジャワ島などに到達して秋の渡りを終えるという。その距離、約一万キロ。約一カ月の壮大な旅だ。インドネシアあたりで越冬したハチクマは二月から三月にかけて春の渡りを始め、気象条件が異なるため秋とは違うコースで再び繁殖地の日本を目指す。気がかりなことは、渡り鳥の通る場所は風況がよいため、佐世保付近の山には風力発電の建設計画が常に持ち上がるということだ。ハチクマにとって障害物は命取りとなる。

●はやばやと黒揚羽きて花色の濃きおほむらさきの花にまつはる

丸山弘子

オオムラサキという蝶を思い浮かべてしまうが、ここでは花。ツツジの一種のようだ。ツツジのなかで花が一番大きく、赤紫色の花で、ふつうツツジといえはこの種類を指すという。作者はこゝしも黒揚羽蝶を見たのだが、いつもの年より早いと気づく。植物に詳しく、蝶との関係に敏感な作者である。黒揚羽の歌、もう一首。

色を忌み黒揚羽蝶の去るまでを寿の文字書きたるとふ亡母<sup>は</sup>

●蒼穹を背に坂道をくだりくる少年すがしき風とともに来

結城 文

「蒼穹」は青空、大空、蒼天のこと。青空を背中に背負うように少年は坂道を下ってきた。すがしい風と一緒にというから、少年は自転車に乗っていたのか。一枚の絵のようにも、また美しい彫像のようにも思われるが、風があることでリアリティーを感じる。つぎは根元的な祈りの歌。

とどくとと思はねど祈るほかはなく直ぐたつ杉の上の青空